

1. 訪問団体の活動やマネジメントなど、どの部分を日本のボランティアリーダーとして生かせるか。

ドイツが誇る2大自然環境保護団体 NABU と BUND。どちらも連邦・州・地域という国の政治体系に沿った組織体制を持ち、各地域に住む会員からボトムアップによる意見の集約により、守るべき希少な動植物の保護活動や環境教育活動を行い、必要であれば保護すべき土地を購入する、あるいは連邦や州の法律を変えるほどの力を持つ団体である。

私は研修に参加するにあたり、自分の所属する NPO の活動をより多くの人に知ってもらい、より多くの人を活動に巻き込む（会員になってもらう・寄付をしてもらう）ためには、どうしたらいいかという問題解決のヒントを得ることを目的としてきた。ところが、そもそも「寄付」という概念自体が今回の研修の前と後で大きく変わった。今までは寄付と言うと「お金」のイメージしかなかったが、物や材料、ボランティアしてくださる方のマンパワー（労働力の提供）も寄付であるということ。そういう意味では、私たちの活動は今まで多くの寄付者により支えられてきたという気付きとなった。さらには、寄付をお願いすることは気が引けることだと思っていたが、多くの方は良い事をしたいと考えていて、寄付を必要とする側がいかにかそのチャンスを提供できるか、回数を増やせるかということが、寄付をしてくださる方にとって「喜び」につながり得るという視点に気づかされた。また、身近な人には寄付をお願いしづらいという思いがあったが、まず身近な人にこそ声をかけ、積極的に関わってもらうことが大事なのであると学んだ。

NABU も BUND も社会に影響を与える“数の力”（会員・寄付の獲得）のために常に自らの活動内容状況を発信し、戦略的なアピールをしている。その中から日本の NPO でも十分通用し、生かせると思う部分を以下にまとめる。

#### ① ファンの発掘

周りの人のつながりを見直し、「寄付してくれる人」「一緒に活動してくれる人」を常に探す意識を持つ。自分達の活動を支えてくれる近所の方、イベント参加者・施設利用者、その親・兄弟・友人・知人、地元の NPO、取引先、地元の企業など。

#### ② 寄付のきっかけを生むという意識

イベントだけでなく、例えば「〇〇が必要」「〇〇を修理したい」「〇〇を始めた」などの困り事・ハプニング・新しい活動を、寄付をお願いするきっかけに結びつける。

#### ③ 情報の発信

必要としている金額・物・材料・労働力が、いつ、何のために、どのくらい必要なのかを明確にして、感情に訴えかける伝え方（フレーズ）を考え、対象者によってベストな媒体を選ぶ。イベントの事前・事後、または定期的に繰り返し発信することで擦りこむ。

#### ④ 感謝の気持ちを伝える

寄付してくれた人に対して感謝の気持ちを伝える。ポイントはできるだけ直接。言葉

だけでなく、領収書・証明書・認定証・表彰状など、目に見える形で表現すること。寄付してくれた人にどれだけ満足感を与えられるか。重要なのは人と人とのコンタクトであり、ここでも感情に訴えること大切である。

⑤ 継続する

一度断られても、諦めずに再度誘う。あなたの力が必要だと訴え続ける。

今回の研修で、特に意識してこなかった“数の力”の重要性を改めて認識し、独りよがりにならずに、より社会に影響を与えられるように活動するためには、周囲の人々から信頼されることが何より重要である。そのためには、正直で、透明で、オープンな組織運営を行うことが不可欠であると学んだ。以上のことを、まずは自分の所属する NPO の現場の中で実践していきたい。

2. 研修を通して、日本の環境ボランティアリーダーを支援するために、どのような仕組みが考えられるか。

ドイツのエフイーオットのような環境ボランティア研修制度が、日本各地に存在する環境ボランティアリーダー会メンバーのネットワークで構築されれば理想的であると考えられる。日本でも、自分がやりたいことが分からない、環境問題に興味を持っていても、実際どんな仕事に就くことができるのか情報を集められない若者は増えている。そういった若者を全国で活躍する各環境ボランティアリーダーOB・OG から、人材を育成するための研修の場を提供してもらい、実社会に触れ、自分の興味のあることにローリスクでチャレンジできるというシステムがあれば、これからの日本においても非常に有意義であると考えられる。やる気のある若者が現場に入ることによって、受け入れ先にも新しい風が吹き、活性化されることが予想される。但し、最低限の生活費を保証するための資金調達、研修生と受け入れ先のマッチングがうまくいかない場合の調整、効果のある研修システムの構築、受け入れ先が研修生を安い労働力と捉えないように、人材育成プログラムとしての意識を高めるなどの準備の必要性が考えられる。

私自身、大学卒業後、日本青年奉仕協会という財団による「一年間ボランティア」という企画に参加し、その活動先であった羽根木プレーパークという冒険遊び場での経験が、今の仕事にたどりつく原点になっている。研修先で出会う人々（スタッフ、子ども達、世話人と呼ばれる地元の方々）はもちろん、全国 50 か所以上の同期生と仲間になれる横のつながり、受け入れ先の先輩後輩との縦のつながりもまた、貴重な出会いであった。環境ボランティアリーダーであれば、今回訪問したヘッセン州環境学習センターの担当者のように、若者の人材育成という本来の主旨に沿った受け入れ態勢を整えることができると考えられる。新人研修で必要なのは「常に話し合い、やる

気を引き出すこと」。いかに意識の高いスタッフが受け入れ担当をしてくれるかが重要な課題になるが、将来的には若者が育てば、同じ分野で活躍するリーダーが増えていくことにより、環境問題を共に考えていく人材が増え、各種環境問題解決への底上げにつながると思われる。

### 3. 全体を通しての感想

毎日毎日学びの内容が濃く、入ってくる情報量がとても多い研修だった。論理的で真面目なドイツ人ならではの国民性や、歴史的背景による影響で、学んだ内容もそのまますぐに実践ということが難しい部分が多々あったが、日本流にアレンジして使える「ヒント」は存分に詰まった研修であった。

日本では考えられない程の大きな組織である NABU や BUND の圧倒的な数の力と、それを支える「自分の地域の問題を自分で責任を持って解決しようとする姿勢」に感銘を受けた。また、森のようちえんで見た自然の中で無邪気に遊ぶ子ども達の姿や、それをあたたかく見守る先生方のまなざしを生で感じられ、とても共感でき幸せだった。一方で、ガルツバイラーの炭鉱と、その計画により強制的に住民が追い出されてしまったイマラートという町を見学したときには、原発事故により先の見えない生活を余儀なくされている地元・福島の人々への想いが重なり、人間のエゴ・愚かさの極みを見たように思い、つらい気持ちにもなりました。

それでも「(解決するまで) 何十年かかろうと、活動を続けていく」という強い信念を持ちながら環境活動に参加している皆さんの笑顔を見て、実際の言葉を耳で聞くことが出来た経験は本当に貴重なものであった。また、人材教育や街づくりの視点からも、ドイツの環境に配慮した素晴らしいシステムを学ぶことができた。研修で出会ったドイツの皆さんがよく口にしていた「この仕事が好き」という熱い気持ち。自分の地域で起こったことは、自分達で解決しようとする強い責任感。そういった言動は、自らやってみようという自発性(自由意思)によるもので、その根幹を育む環境教育である「森のようちえん」は、現代においてとても重要な活動であると実感できたことが嬉しかった。

研修の最終日、自分が日本に帰ってぜひ実践したいことを発表するという時間があり、私は福島から新潟に避難している親子を対象とした保養キャンプに必要な、甲状腺数値の測定機を購入するための資金を、来年5月までに集めるという宣言をした。今回の研修では、度々講師の方が 3.11 の話題に触れ、ドイツの原発廃止は以前から議論されていたが、3.11 がきっかけで期限が早まり、ドイツ国民全体の環境への意識が高まったと話されていた。その度に私は、なぜ当事者である日本ではそういう革命が起きないのだろうと恥ずかしいような、情けないような気持ちになった。起きてしまった事実は変えられないが、今現在、原発事故が理由で不自由な生活を余儀なくされている方は大勢いて、また実際に放射能の影響で健康への不安を抱えながら生活している人もたくさんいる。

私は現在ボランティアで、極度にストレスがかかる生活を送りながら新潟に避難している母子、また避難したいけれど様々な原因で避難できないでいる親子を対象にした保養キャンプの手伝いをしている。今後、このような活動を私達のNPOで運営していくことも視野に入れながら、さらに深く関わっていきたいと思っていた中でのドイツ研修であった。まずは宣言し、一歩踏み出すことから始めたいと考えている。

今回、活動分野や地域、年齢も異なる16期生の皆さんとのかけがえのない出会いはとても大きいものでした。皆さんと一緒に学びの場を持てたからこそ、また、この研修をコーディネートしてくださった小野さん、プロフェッショナルな通訳で私達をサポートしてくださった小島さんのおかげで、日本での活動のヒントを何倍にも増やすことができました。憧れのヨーロッパに行ける！環境先進国ドイツで学べる！といったミーハーな心からスタートしたこの研修が、私にとってかけがえのない濃厚で充実した日々になったのは間違いなく皆さんのおかげでした。本当にありがとうございました。

また、細かい気遣いと笑顔で支えてくださったトップツアーの若井さん、現地の運転手のおじさん、「好きだからこそやっている」という自由意思にあふれ、たくさんの情熱と気付きを与えて下さった講師のみなさま、行く先々で歓待して下さった地元の方々に心から感謝しています。

最後に、全国のセブンイレブンの店頭で募金をしてくださった方々に深く御礼申し上げます。皆様の善意を無駄にしないよう、今回学んだことを一つでも多く実践していきます。本当にありがとうございました。